



@RyotaKawaguchi

〈三年〉

晴海ふ頭・ロマンス / 久保 晃希

猛独 / 西 真希

風媒銀乱——一九九一年に晴海ふ頭に誕生したそのオブジェクトが解体されることになった。

首都・東京の象徴として輝いて、

若者にも人気のあった建造物が無くなるというのは少し、寂しくある。だが、維持費などを考えても常に変化を続けるこの街には古いものは置いて行かれるのだろう。

「更新しない命は置いて行かれる運命か」

東京都心のビル群に沈む夕陽を眺めながらひとり呟く。

俺の恋も、愛も、すべて夕陽に溶けて無くなればいい。

彼女と出会い、別れた。何度も別れたくないと願った。それでもそれは不可能なことで、諦め悪く足掻いてしまった。

「それも、今日で終わりに出来るよ」
亡くなった彼女が使っていた携

帯電話。遺品の中から唯一俺が預かっていた物。

忘れられなくて毎日のように録音された彼女の声を聴いた。

それが逃げで、諦めだということ
は分かっていたんだ。

「人間って弱い生き物だね」

声の主を見やるとそこには自分と同じ姿をした青年が立っていた。

唯一異なるのは瞳に生が宿っているか死が宿っているかだ。俺の目は死が宿っているんだ。生を宿す彼の目は眩しくて仕方ない。

「お前のように単一で存在できる訳じゃないからな」

ここ数日、彼は俺の前に現れ続けた。まるで彼女のことを忘れきれない俺を責めるかのように。

「僕だって、君がいなければ存在できない。もう気づいているんだろう、僕が何者なのか」

「知っているが、答える気はない。お前だって、答えられたくないだろう」

おそらくこいつと会話をするのは今日で最期だ。

「万理華^{まりか}ちゃんはそれで許してくれるのかい？」

「さあな、分からん。ただそれでも俺が選んだ道だ」

「そうか、なら早くするんだね。決意が乱れる前に」

そこまで言って、彼は消えた。

初めてあった場所。

デートに困ったらほとんどこの場所に来て、沈む夕陽を眺めるだけだった。思っている以上に退屈なアベックだこと。

だが、身体の悪い彼女を無理に動

かす訳にもいかなかった。

「万理華、今日でお別れだ」

俺は握っていた携帯電話を東京湾に向かって投げた。

不法投棄だけど、今日だけは許して欲しい。三年、長くも短い付き合いだった彼女との思い出と別れたんだ。

新しい人生の門出を今日だけは

祝って欲しい。だからと言って明日がある訳ではないのだけど――。

「――本当に不器用な生き方しかできない人」

近くのベンチに横になった時にどこからともなく聞こえてきた声、

忘れもしない彼女の、万理華の声だ。

「それが……おれだから……」

「自分の恋人に義理立てて自殺することが？」

「義理立てじゃない――」ただ俺が弱かったんだ。お前の居る世界が俺の居る世界で、お前の居ない世界は俺の生きる世界じゃなかったってことだ。

だから死ぬ。

「――そう、だったら向こうで待ってるね」

「一緒には、行ってくれないのか」

「せっかく再会した恋人同士なのだから、私たち一度もしてこなかっ

た「じゃあ、またね」をしましょう。

これから先は長いんだから」

「そ、う……だと……いいな」

俺の意識はそこで途切れた。

いつかの夢を追いかけ続けた俺
という人間は消える。

あの夕陽に今度こそ消えること
が出来るのだ。

幻聴でも幻覚でもない向こうに
行けば君は俺のことを怒るだろう
か、それでもいいさ。君ともう一度
言葉を交わせるのなら。

——晴海ふ頭の夕陽は沈んだ。

埠頭から見る街は、見慣れた日常の風景そのものだ。空に伸びるビル群、河川に架かる橋、地上に大きな影を伸ばす夕陽。茜色に染まった感傷的な世界には、微睡みを誘うような、静かな空気が漂っている。

「孤独って言葉があるだろ？」

頭上から声を掛けられた。見上げると、背の高いオブジェの上で、少女が胡坐あくらを掻かいている。修道服に袈裟けさを着た彼女は、きつと誰が見てもチグハグな姿だ。

「あれは多分、『ひとり』って名前の毒だと思うんだ」

遠くに広がる街並みを見つめな

がら、彼女は言葉を続けた。それは、僕に向けた言葉にも思え、彼女自身に投げかける呟ささやきにも思えた。僕が黙って彼女を見上げてみると、そこでようやく、彼女はこちらに視線を下げた。

「お前は今、猛毒に侵されている」

「そうなんだ。自覚ないや」

孤独が毒だというのなら、確かに僕は孤独に侵されているのだろう。この街には今、僕以外の人間がい

いのだから。……否、この街だけじゃない。この世界からは、僕を除く全人類が消え去ってしまった。見慣れたこの街並みは、無人の廃墟

と化しているのだ。

僕に語り掛ける彼女は、曰く神様であるらしい。そして同時に、世界から人類を消し去った張本人でもある。どんな顔して、人類最後の一人である、僕の目の前に現れているのだろうか。

「なあ、人間」

「種族名って」

「事実上の個体名だろ。……独りになつて、悲しいか？」

何うような問いかけに、少しだけ可笑しくなった。オブジェの上で尊大な態度をとっておきながら、この神様は案外に人間臭い。人類が彼女

に創られたのだという事実も、なるほど確かに納得できる。

「悲しいよ。でも存外に、寂しくはない」

風が小さく吹いた。潮の匂いが漂って、また言いようのない感傷が襲ってくる。

「……そうか、やはりそうか」

何かを納得したように、彼女は大袈裟に頷いて見せた。やはり、神様の考えていることはよく分らない。一日で八十億人を消し去る感覚だって、理解できるはずがないのだから。

「教えてよ神様。そうやって、一人

……？ で、納得してないでさ」

「教えてって、何を？」

首を傾げるその姿は、年相応の少女でしかなかった。変に感情が豊か

というか、やはりそう、人間臭い。

「八十億人を消して、僕だけを残して、僕の目の前に現れて、心の内を

尋ねた理由」

「全部かよ」

「そりゃそうだよ。人類は欲深いんだから」

「怠^{だる}いな、人間」

頭上からため息が降ってきた。と同時に、彼女はオブジェから降りて

きて、その根元にもたれかかる。僕

の隣に立った神様は、暫くの間悩むように視線の先の水面を見つめて、

その後観念したように口を開いた。

「私はずっと独りなんだよ。それが悲しくて、寂しかった。だから人類

を一人にしたら、そいつが友達になつてくれるかなって」

「なにそれ。不器用通り越して暴君だよ」

発想と規模が桁違いだ。そもそも、自分以外の全人類が居なくなつたからと言って、消した張本人と仲良くなるうという考えに至る人間は、相当珍しいだろう。

「でもまあ、寂しくないからいい

か」

僕の呟きに、彼女は再び首を傾げた。孤独に苦しんでいたというし、想像以上に全知全能からは程遠いようだ。僕は努めていつも通り、一人の少女と話すつもりで、言葉を紡ぐ。

「孤独っていう毒に侵されている自覚はないよ。だって、神様がいるんだし」

「私が言うのもなんだが、お前変わってるよな」

「君が創ったんだよ」

埠頭から見る街は、見慣れた日常の風景そのものだ。空に伸びるビル

群、河川に架かる橋、地上に大きな影を伸ばす夕陽。茜色に染まった感傷的な世界には、微睡みを誘うような、静かな空気が漂っている。けれど、不思議と寂しくはなかった。